

仙台市文化財調査報告書第6集

仙台市荒巻

五本松窯跡

発掘調査報告書

昭和48年10月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第6集

仙台市荒巻

五本松窯跡

発掘調査報告書

昭和48年10月

仙台市教育委員会

序

仙台市台原・小田原一帯の丘陵部は、今を去る千有余年前の古瓦などを出すところとして古くから注目され、学界でも、多賀城跡や陸奥国分寺跡などと関連の深い窯跡群である、との評価を受けてきました。

五本松窯跡は、仙台市荒巻五本松の国有林内に所在する遺跡ではありますが、たまたま、仙台市公園課企画の台原森林公園造成計画において、その駐車場予定地内に、この窯跡がかかることが判明しました。

そこで、仙台市教育委員会は、公園課と協議の上、保存を前提として窯跡の実態調査を実施することとし、昭和47年8月、東北大学名誉教授伊東信雄氏に調査担当を依頼し、調査を実施しました。

その結果、2基の瓦窯跡が確認され、台原・小田原窯跡群の北西の一角を占める貴重な遺跡であることが判明しました。

そしてまた、本窯跡が、関係者の方々の御理解と御努力によって、永久保存されることになったことは、郷土の文化財を長く後世に伝える義務をもつ私たちにとって、とくに喜びとするところであります。ここに、これら関係者の方々に厚く感謝の意を表するとともに、これらの資料が、多くの方々に有効に活用されることを願ってやまない次第であります。

昭和48年10月

仙台市教育委員会 教育長 佐藤 敬

目 次

序	仙台市教育委員会教育長 佐藤 敬	
I 遺跡の位置と環境		1
II 調査に至る経過		1
III 調査経過		2
IV 調査内容		3
A 検出遺構		3
B 1号窯跡		3
C 2号窯跡		4
D 出土遺物		5
V 考察とまとめ		6
A 遺物の考察と遺跡の年代判定		6
B 台原窯跡群の諸問題		6
VI むすび		8

図 版 目 次

表1 台原・小田原窯跡群一覽	
表2 略年表	
図1 五本松窯跡周辺の古瓦出土地	
図2 台原・小田原窯跡群分布図	
図3 五本松窯跡A地点地形図	
図4 五本松A地点窯跡実測図	
図5 五本松窯跡1号窯出土軒丸瓦	
図6 五本松窯跡1号窯出土土瓦拓影	
図7 五本松窯跡1号窯底出土土瓦	
図8 志波遺跡出土土瓦拓影	
写真1 台原地区航空写真	
写真2 遺跡写真	
A 遺跡遠景	
B 遺構検出写真	
写真3 1号窯跡検出写真	
写真4 1号窯底出土の瓦	

本稿の執筆、編集には、仙台市教育委員会社会教育課嘱託岩岡康治があたった。



写真1 台原地区航空写真(約10,500分の1) ×は発掘調査地点

五本松窯跡調査報告書

I 遺跡の位置と環境(図2、表1、写真1)

五本松窯跡は、仙台市荒巻五本松の仙台管林署管轄の国有地内にあり、周辺は、アカマツ、スギなどを基本植生とする国有林となっている。ちょうど仙台駅の北方約3.5kmの位置にあり、仙台市北部丘陵地帯の一角にある。これらの丘陵は、広瀬川の形成した段丘群の最上部に位置する台原段丘である。遺跡は、この丘陵の一角に付属する枝尾根の南側傾斜面にあり、付近の標高は約70mである。遺跡の立地基盤は、段丘層の上にカオリン粘土と称するきめ細かい微砂質の黄褐色ローム層が覆っている。このカオリン粘土は、粘着力、懸濁性に富み、窯業原料土として好適の粘土で、江戸時代には、日本三大土人形の一つといわれる埴人形、埴焼を産み出した原料土であり、古くから良好な窯業立地基盤を形成してきたのである。

現在までのところ、国道4号線沿いの堤町地区から台原、小田原、案内にかけては、奈良時代以降の、数十を越える窯跡群の存在が確認され、東北地方でも有数の古窯跡群として学界の注目を浴びてきたが、なお未発見の窯跡も相当数あると思われる。以上の古窯跡群の過半数は、良好な地盤を背景とした大規模な宅地造成の進行の中で次々と消滅していった。これに対し、これらの窯跡群の実態究明の試みも地道ながら続けられてきた。戦前における故内藤政恒博士らの研究、戦後は、東北学院大学考古学研究部、古窯跡研究会などの手によるいくたびかの発掘調査、分布調査などの活動があり、幾多の成果が显示されてきた。一方、こうした貴重な文化遺産を守ろうという保護運動の声は、急速な宅地需要の前にはあまりにも弱く、多くの窯跡が次々と壊滅していったことは実に惜しむべきことであった。

II 調査に至る経過

五本松窯跡は、学界においては、戦前から、故内藤政恒博士らの調査でその存在がすでに確認されていたが、その後、その正確な位置について「全国遺跡地図」(文化財保護委員会編・昭41)の記載にもまれ、また、国有林内にあって、必ずしも周知の遺跡とはいきれない状況にあった。ところが、昭和43年、仙台市建設局公園課がこの周辺の国有林を活かした台原森林公園の建設を計画した。そして、その公園の入口に駐車場を造成することになったが、ここに2基の窯跡の所在が、古窯跡研究会会員により再確認された。その窯跡は、もともと林道のため窯の一部が削られ、断面が露出していたため、明確に窯跡の所在が確認できたのである。

このため、仙台市教育委員会では、この窯跡が台原・小田原古窯跡群中の西北の一角を占めるものとして重視し、公園課と協議した結果、公園課において駐車場造成計画の設計を一部変

更し、窯跡の保存について善処することを前提とし、あわせて市民の活用に供しうべく、窯跡の実態を調査することになったものである。

調査組織は次のとおりである。

- 調査期間 昭和47年8月21日～26日
- 調査主体 仙台市教育委員会
- 調査担当者 伊東 信雄(仙台市文化財保護委員)
- 調査員 工藤 雅樹(宮城県多賀城跡調査研究所技師)
桑原 滋郎(宮城県多賀城跡調査研究所技師)
渡辺 泰伸(古窯跡研究会代表)
岩淵 康治(仙台市教育委員会社会教育課)
- 調査補助員 川村 正(東北学院大学考古学研究部)
遊佐 五郎、太田 昭夫、大友 みつえ、三浦 好江、
渋谷 正三、斎藤 智恵子、真砂 まゆみ、小野寺 祥一郎
(以上、宮城教育大学考古学研究会)
- 調査協力 仙台市建設局公園課
宮城県多賀城跡調査研究所
- 調査団事務局 黒沢 充(仙台市教育委員会社会教育課長)
瀬戸 捷夫(仙台市教育委員会社会教育係長)
鈴木 高文、小林 斉(仙台市教育委員会社会教育課主事文化財担当)
大泉 重治(仙台市教育委員会社会教育課嘱託)

III 調査経過(図3)

調査は、駐車場造成予定区域内で検出された2基の窯跡の実態の究明をねらいとして進められた。すなわち、窯跡断面が検出された区域を中心として東西7m×南北7mのトレンチを設定、合計49m²について発掘を進めた。

第一日目に調査区域の下刈りなどを完了し、第二日目には表土排除にかかった。表土下20～30cmで黄褐色ローム層面に達し、この上面で東西に並列した2基の窯体の輪郭を検出し、東側を第1号窯、西側を第2号窯とした。第三日目には、1号窯の窯体の軸線を基線として遺り形を設定、同時に窯体の掘り下げを開始した。第四日目にはいり、窯体の掘り下げと並行して実測作業を開始、また、遺物の洗浄、注記作業も並行して実施した。第五日、第六日にかけて実測作業、写真撮影、遺物整理を完了し、第七日目には埋め戻し作業を行って調査を終えた。ま

た、第五日に発掘成果の記者発表を行い、翌日現地説明会を開催する予定であったが雨のため中止した。

埋め戻しにあたっては、遺構面に砂を散布し、埋め戻し作業完了後、雨水などによる土砂崩壊と遺構の荒廃を防止するため、発掘区域全面に芝付けを行い、遺構の保護に努めた。

現在、遺構は、台原森林公園の南側入口にあって良好に保存されており、今後は、説明板などの設置によって一般市民に遺跡の意義を普及する予定である。また、周辺地帯にはなお多くの関連する窯跡が残存しているものと見られ、これらの窯跡の保存にも最善を尽くすつもりである。

IV 調査内容

A 検出遺構(図4、写真2)

今回の発掘調査で検出した窯跡は2基であり、ほかには隣接区域での窯跡の発見はなされなかった。あるいは、周辺の地形変更が著しかったためにすでに破壊されたのかもしれない。しかし、地形的に一連の傾斜面で凸瓦の散布が何ヶ所かで見られ、未調査の窯跡の存在が考えられるので、一応これらと区別するために、今回の調査区域を「五本松A地点窯跡」と呼称することにしたい。五本松A地点の2基の窯跡の主軸線の方向は、ほぼ丘陵斜面の方向と一致していて、両窯跡の軸線の間隔は約3.5mである。このうち、検出時に、東側のものを第1号窯、西側のものを第2号窯と呼称する。両窯跡は、いずれも細砂質の黄褐色ローム層を掘りくぼめて窯底とした、いわゆる半地下式の竈窯に属するものである。調査以前に、林道開きなどの影響で窯体の下半部はほとんど失われていた。とくに、2号窯の破壊は著しく、窯体の上端1mくらいしか遺存していなかった。

B 1号窯跡(写真3)

五本松窯跡A地点東側の窯跡である。

平面形 窯体下半部が削平されているため全容についての確定はできないが、現存する部分は、主軸長4.0m、窯体幅75～80cmで細長い長楕円形を呈する。煙道は検出できなかったが、細長く床面がゆるく傾斜した煙成部と、一段深くおちこんで炭が充満していた燃焼部の一部が遺存していて、焚口、前庭、灰原などは削平されて失われていた。焼成部の長さは3.4m、燃焼部の遺存せる長さは0.6mである。燃焼部と焼成部との境界には、平瓦の破片を立てた状態でしきりがつけられていた。主軸の方向はN12°09'Wで、磁北よりやや西よりである。

断面形 縦断面は浅い舟底形を呈し、平出だがゆるく傾斜した床面を持つ焼成部および一段深

くおちこんだ燃焼部とからなっており、それぞれの床面はほぼ平坦である。掘りこみの深さは20cm前後である。

焼成部の状況 床面は、表面から深さ5cm内外が灰色に固く焼けており、その下10cm前後まで赤褐色に焼けている。これは、表面がくすべ焼きのために灰色になり、その下は火熱の伝導により赤化したものと思われる。また、床面直上3ヶ所で、平瓦および丸瓦が床に張りついてしき並べたような状況で検出されたが、これらは施設瓦と見られる。床面そのものに段などの工作はなかった。側壁はほぼ垂直に近い立ちあがりをもつ。壁面の状況も、表面が灰色、その下が赤褐色、と床面同様明瞭な色彩的対比をなしている。埋土は、概してサラッとした暗褐色土であり、スサ入り窯壁の断片、瓦破片などが含まれていた。窯壁の検出は天井部の存在を想定させる。

燃焼部の状況 燃焼部下半は削りとられているが、残存しているのは焼成部との境から0.7mくらいまでで丸く残っている。焼成部との境には平瓦破片が横に立てならべてあり、この部分を境として底面傾斜が一段と深くなっている。埋土には炭が充満していた。底面は焼成部同様表面が灰色に焼け、その下が赤褐色になっている。

窯体外での所見 窯尻前方60cmくらいのところで、径60cm、深さ10cm、底面平坦な不整形のピットが検出された。埋土は窯体内の埋土とはやや異なり、暗褐色土と炭褐色土とが互層になっており、最上層からは炭、焼土とともに瓦の大きな破片が出土した。その他、窯体周囲でかなりの量の瓦の出土を見た。

遺物の出土状況 瓦のみであるが、窯体内部の埋土中からの出土量は少く、破片も小さいものが多い。窯底からの出土量が比較的多く、まとまったものが多い。平瓦、丸瓦（筒瓦を含む）とも出土しているが、いずれも凸部を上に向けた出土状況のものが多く、一定間隔で出土していることから施設瓦ではないかと思われる。また、軒丸瓦の小破片も窯体の埋土中から6点出土している。

C 2号窯跡

五本松A地点西側の窯跡である。

平面形 窯体のかなりの部分が削りされているため、全容は不明。残存しているのは、焼成部の上端のみで、主軸長0.65m、幅0.7mの半円形である。1号窯同様、細砂質の黄褐色ロームをくりぬいて作られた半地下式窯であろう。

焼成部の状況 床面、側壁とも、表面から深さ10cmくらいまで赤褐色に焼けていた。1号窯のように、表面が灰色に焼けた状況は見られなかった。埋土中に、スサ入り窯壁の断片が含まれていた。

煙道部、燃焼部、焚口部、前庭部、灰原などは削平されて検出できなかった。

窯体外での所見 窯尻前方1.5m 付近で、65×55 (cm) の楕円形の浅いピットが検出された。埋土中には、炭、焼土粒などをかなり含んでいたが、底面は焼けていなかった。

出土遺物 丸、平瓦のみであるが、窯体内からの出土量は少く、表土中からの出土品が大部分である。

D 出土遺物(図5, 6, 7, 写真4)

今回の発掘調査により出土した遺物は瓦類のみで、その他には須恵器が若干表採されている。遺物出土量は、破片にして100片前後である。

瓦類 軒丸瓦、丸瓦、平瓦の各種類がある。1号、2号各窯から出土した丸、平瓦には、ほとんどちがいが認められない。これらについて、その概要を記すと次のとおりである。全般に焼瓦や自然釉の付着したものが目立った。

(イ) 軒丸瓦(図5)

軒丸瓦の破片は、6点出土しているが、いずれも1号窯からの出土品である。2号窯からは出土していない。いずれも瓦当面周縁部の小破片のみで瓦当面の文様を確定することがむずかしい。しかし、そのうちの3点については、他の報告書の例との比較によって文様を想定することが可能である。(以下工藤雅樹氏らの御教示を頂いた。)

(IのA)は、周縁に珠文が見られない点を考えて、齒車文鏡瓦(IのB)に比定されるのではないと思われる。(IIのA)は珠文の痕跡などから判断して、宝相花文(IIのB)もしくは細弁蓮華文に比定した方がよいと思われるがきわめて不確実である。(IIIのA)は小破片であるが、周縁部のかかなり特徴的な部分が遺存しており、おそらく変形花文(IIIのB)であろうと思われる。どの瓦も、少なくとも、重弁蓮華文などの古式の軒丸瓦でないことは確かである。不確実な面もあるが、以上を通してみると、これら3つの軒丸瓦は、いずれも、ほぼ多賀城第4期頃に属するものと見てよいだろう。

(ロ) 丸瓦(筒瓦)(図6のB)

細片が多いが、だいたい玉縁有段のものが多く、凸面には、縄叩き目がほどこされ、それをていねいに擦り消しているが、部分的に縄叩き目が残っているものもある。凹面には、すべて布目が施されているほか、幅3cmほどの粘土巻き上げの痕跡が見られ、擦り消しなどの形跡はほとんどない。また、丸瓦筒部先端には、2、3の細い棒の痕跡があるものもあり、生瓦を陰下しした形跡が伺われる。

(ハ) 平瓦(図6のA)

凸面には縄叩き目、凹面には布目が施されており、いずれも擦り消しの形跡はほとんど見

られない。布目の中には、非常に目の細かいものもある。ほとんどが一枚造りと思われる。須恵器 2点出土しているが、いずれも表採資料である。一つは甕の破片だろうと思われるが、表には叩き目、裏には青海波文が施されている。もう一点は、灰褐色をした坏の破片である。糸切り底で、体部は外反しつつ立ちあがる。

V 考察とまとめ

A 遺物の考察と遺跡の年代判定(表II)

前述のとおり、1号窯から、文様の想定可能な軒丸瓦が3点ほど出土した。それぞれ、歯車文、宝相花文などと考えられる。また、平瓦は、ほとんど一枚造りの製法によるものと見られた。布目、縄目の擦り消しはほとんど見られなかった。丸瓦は、ほとんどが玉縁有段のものであり、いずれも巻上げ痕の認められるものであった。以上のような諸点のうち、とくに、軒丸瓦は、いずれも多賀城第4期のものに比定でき、平瓦、丸瓦の諸特徴も、時代的に矛盾しない。一方、2号窯からは軒丸瓦の出土は見られず、1号窯以上に時期の判定がむずかしいが、2号出土の平瓦、丸瓦の諸特徴が1号のものに類似し、1号、2号間の位置関係も一定している点などから、1号窯と近似した時期のものとして見てよいだろう。また、窯跡自体の床の焼面の厚さはさほど厚くなく、床を貼り替えた形跡もなく、本窯跡の存続期は、比較的短期間のもではなかったかと思われる。

つまり、1号、2号窯とも、ほぼ多賀城第4期の時期、すなわち、9～10世紀の間の一時期に営まれたものと想定することができよう。

B 台原窯跡群の諸問題

(イ) 窯跡群の分布(図2、表1)

台原窯跡群は、一般には、地形的な連続性から、台原・小田原古窯跡群として一括して呼称され、戦前から学界の注目を浴びてきた。すなわち、戦前は、村主、内藤らの地道な研究があり、戦後は、激しい宅地開発攻勢による、なしくずし的な窯跡群破壊の相次ぐ中で、東北学院大および古窯跡研究会などの手により、地道な分布調査、発掘調査などが続けられ、実態解明への努力がなされてきた。その結果、数十箇所もの窯跡群の存在が確認されたのだが、その半数近くはすでに破壊され、また、正式の発掘調査がなされたのも、今回を含めわずか5箇所といった現状である。

ところで、これら台原・小田原古窯跡群として一括呼称される窯跡群も、局所的な地形、水場の共有といった観点から見て、いくつかのブロックに分けることができるように思われ

る。ここでは、現在の東照宮以西を台原窯跡群とし、以東を小田原古窯跡群と呼んでおく。そうしてみると、小田原古窯跡群が、比較的窯跡の分布が多く知られ、調査もよくなされてきたに対し、台原窯跡群の場合は、宅地化が古くから進展し、未調査のまま破壊されたものが多く、また、一ヶ所にまとまって群としてとらえられる窯跡が少なかった。五本松窯跡も、そうした状況の中で破壊されようとした窯跡であった。だが、調査期間中に踏査した所によれば（恵美昌之氏らの御教示にもとづく）、周辺の斜面には、多くの古瓦の散布が見られ、しかも、これらの傾斜面が同一の沢を共有する点などから、五本松窯跡は一つの大きな窯跡群を構成していると思われる。今回の調査区域を「五本松窯跡A地点」としたのはこうした状況によるものである。こうして、従来、点としてのみとらえられてきた台原窯跡群のその北西の一角に一つのブロックとしての窯跡の存在が確定できたのである。

そのほか、現在までに知られている窯跡をブロック毎にまとめてみると、I表のようになるのではないかと見られる。

(ロ) 五本松窯跡の供給地の問題(図1)

仙台市内および周辺地区で、窯跡以外の古瓦出土遺跡を列举すると次のようになる。

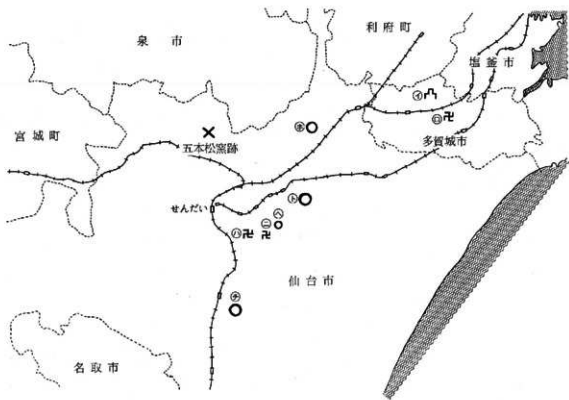


図1 五本松窯跡周辺の古瓦出土地 (縮尺 1:160,000)

- 〈イ〉 多賀城跡・多賀城市市川・五本松窯跡から9.6 km
- 〈ロ〉 多賀城麴寺跡・多賀城市高崎・五本松窯跡から11.4 km
- 〈ハ〉 陸奥国分寺跡・仙台市木ノ下・五本松窯跡から4.7 km
- 〈ニ〉 陸奥国分尼寺跡・仙台市志波町・五本松窯跡から4.9 km
- 〈ホ〉 燕沢遺跡・仙台市燕沢・五本松窯跡から4.5 km
- 〈ヘ〉 志波遺跡・仙台市志波町・五本松窯跡から5.0 km (図8)
- 〈ト〉 苦竹遺跡・仙台市苦竹・五本松窯跡から5.1 km (伝聞)
- 〈チ〉 郡山遺跡・仙台市郡山・五本松窯跡から8.0 km

以上の諸遺跡からの出土瓦と比較対照できるほどの瓦が今回の調査では出土しなかったため、瓦による供給先の決定は不可能であるが、これらのうち、時期的に、イ、ロ、ハ、ニの創建期には、本窯跡からの瓦の供給がなされていないことは、ほとんど確実である。また、〈ト〉の郡山遺跡は、広瀬川の南対岸にある上、西多賀の八木山丘陵付近に、郡山遺跡出土瓦と同様の瓦を出土する窯跡が何ヶ所あることが知られており、これも、五本松窯跡の主たる供給先ではなかったと見られる。〈ホ〉、〈ヘ〉、〈ト〉は、現在、性格不明の遺跡であるが、〈ホ〉は、地形的に見て、窯跡である可能性もある。〈ヘ〉、〈ト〉は、地理的に近接していて、一連の遺跡であるとも見られ、一つの官衙遺跡と考えてよいのではないかと思われる。距離的に見て、主たる供給地として考えられるのは、〈ハ〉、〈ニ〉、〈ヘ〉、〈ト〉などであり、しかも、時期的に見て、補修用瓦ないし葺きかえ用の瓦を供給したと見てよいだろう。

イ) 要約

- ① 五本松窯跡は、台原・小田原窯跡群中の他の窯跡と同じく、古代陸奥国の官窯跡であろう。
- ② 五本松窯跡が営まれた年代は、出土瓦からみて、多賀城第4期、すなわち9～10世紀頃の一時期にあたと見られる。
- ③ 五本松窯跡の主たる供給先は、陸奥国分寺などの官衙遺跡であろう。
- ④ 五本松窯跡は、今回の調査区域以外にも窯跡の存在が考えられ、一つのブロックを形成すると見られる。

VI む す び

これまでふれてきたように、五本松窯跡の今回の調査は、従来、台原地区において実施された最初の調査という点で、まず第一に意義あることと見てよいと思われる。さらに、今回の調査によって与えられた成果は、微視的な把握というよりは巨視的な把握といった観点からよ

り貴重なものといえよう。特に、県内の古代窯業生産システムなどを考えたりする場合、五本松窯跡が一つの大きなブロックを形成していることが判明したことは一つの示唆を与えると思われる。

一方、こうした学術的意義を後世に正しく伝えるためにも、今回の調査の後、本窯跡が永久保存という方向に処理されたことは、調査者として、特によろこびとするところである。思うに、学界における注目にも拘らず、台原・小山原窯跡群は、現実にはあまりにも惨たんたる状況におかれている。それは冒頭の航空写真などに如実に見られるところである。今、台原・小山原窯跡群を考える時、最大の急務はその保存問題である。言うまでもなく、記録保存は記録のみの保存にして、「生きた」文化財のみが提示しうる歴史的感動は得られない。文化財保護に対するより多くの関心が高まり、関係諸機関の御努力によって保存が達成されることを望んでやまない。

末尾ながら、本稿を終えるにあたり、調査を担当され、数々の御指導、御助言を頂いた伊東信雄先生はじめ、瓦の鑑定をはじめ種々の御教示、御協力を頂いた、宮城県多賀城跡調査研究所の岡川茂弘所長、工藤雅樹氏（現東北歴史資料館建設準備室勤務）、桑原滋郎氏、進藤秋輝氏をはじめ、多くの方々に対し、厚く感謝の意を表するものである。

参考文献

- 伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」(仙台市史第3巻・昭25)
- 内藤政恒「仙台市台原・小山原瓦窯跡群と出土の古瓦」(歴史考古3,7,9,10-13)
- 加藤 孝・野崎 準「台原・小山原窯跡群の古窯跡分布とその問題点」(東北文化研究所紀要第4号・昭48)
- 古窯跡研究会「陸奥国官窯跡群」(昭48)
- 楢崎彰一他「古代中世における手工業の発達、1. 窯業」(日本の考古学VI・昭42)
- 大川 清「日本の古代瓦窯」(雄山閣・昭47)
- 陸奥国分寺跡調査委員会「陸奥国分寺跡」(昭36)

表I 台原・小田原窯跡群一覧

No.	名 称	遺 跡 概 要	発掘調査の有無	保存 状 況	備 考
1	堤 町 窯 跡	窯跡数基? 木炭、灰礫混。軒瓦(宝相花文3種、蓮珠文)、唐書、刻印瓦片出土。	無	宅造で消滅?	
2	荒巻一本杉窯跡	窯の痕跡検出。軒瓦(宝相花文、均正唐草文)、埴出土。	無	宅造で消滅?	別称「堤町一本杉窯跡」
3	五本松窯跡	窯跡10基以上? 丸瓦、平瓦、軒瓦(蓮弁蓮花文、均正唐草文)、円面鏡、風字鏡、須恵器など出土。A地点で登窯2基検出。	昭47. A地点調査(仙台市教委—報告書あり)	一部は宅造などで消滅。A地点は調査後保存。	別称「射撃場跡東方、北方窯跡」。「一年坊沢窯跡」
4	小田原辰命坂窯跡	窯跡数基以上? 竇り窯。炭、焼土検出。平瓦、丸瓦、軒瓦(蓮弁蓮花文)、須恵器検出。	無	一部現存、他は宅造などで消滅?	別称「辰命坂窯跡」
5	南光沢窯跡	実態不明。丸瓦、平瓦破片、埴体片出土。	無		
6	奥中前窯跡	地下式登窯5基以上。平瓦、丸瓦、須恵器各種出土。	昭45. 東北学院大調査(報告あり)	宅造で消滅?	
7	与兵衛船窯跡	窯跡10基以上、登窯。平瓦、丸瓦、軒瓦(蓮弁蓮花文、半弧文、偏行西草文)、須恵器等出土。	無	池沼水による崩壊の形跡、竇煙の形跡あり。	別称「蟹沢田窯跡」
8	神明社窯跡	窯跡10基以上、ロストル式平窯3基。平瓦、丸瓦、軒瓦(葉蓮文、半弧文他各種)、丸瓦、須恵器、円面鏡、埴など出土。	昭46. 古窯跡研究会調査(報告書あり)	調査箇所は保存。一部宅造で破壊。	別称「蟹沢中窯跡」「樹井窯跡」
9	二ノ森窯跡	窯跡数基以上、丸瓦、軒瓦(蓮弁蓮花文)、土師器、須恵器、フィブ、磁埴など出土。	無		
10	安養寺中回窯跡	窯跡10基以上、半地下式無段登窯5基。軒瓦(偏行西草文、半弧文、宝相花文、蓮弁蓮華文、繪甲文など)、刻印瓦、須恵器出土。	昭41. 東北学院大調査(報告書あり)	宅造などによりほとんど破壊。	
11	安養寺配水場窯跡	窯跡数基以上。半地下式登窯。須恵器、丸瓦破片出土。	無	配水場建設の際破壊?	
12	安養寺下窯跡	窯跡10基以上。半地下式無段登窯4基検出。軒瓦(蓮弁蓮花文、蓮弧文、山形文)、須恵器、土師器出土。	昭47. 古窯跡研究会調査(調査報告あり)	調査後保存。	
13	鶴ヶ谷窯跡	窯跡2基以上。平瓦出土。	無	昭42. 宅地造成のため破壊。	
14	土手前窯跡	窯跡数基以上。平瓦、丸瓦、軒瓦(蓮弁蓮花文、蓮珠文)、刻印瓦、須恵器等出土。	無	道路拡張、宅造などで遺跡状態	別称「前田窯跡」。「高牧寺修道院前窯跡」
15	大蓮寺窯跡	窯跡数基。丸瓦、平瓦、軒瓦(蓮弁蓮花文、葉蓮文、西草文)、須恵器等出土。焼土、埴体など検出。	無	宅造、畑の深耕による破壊らしい。	別称「案内窯跡」

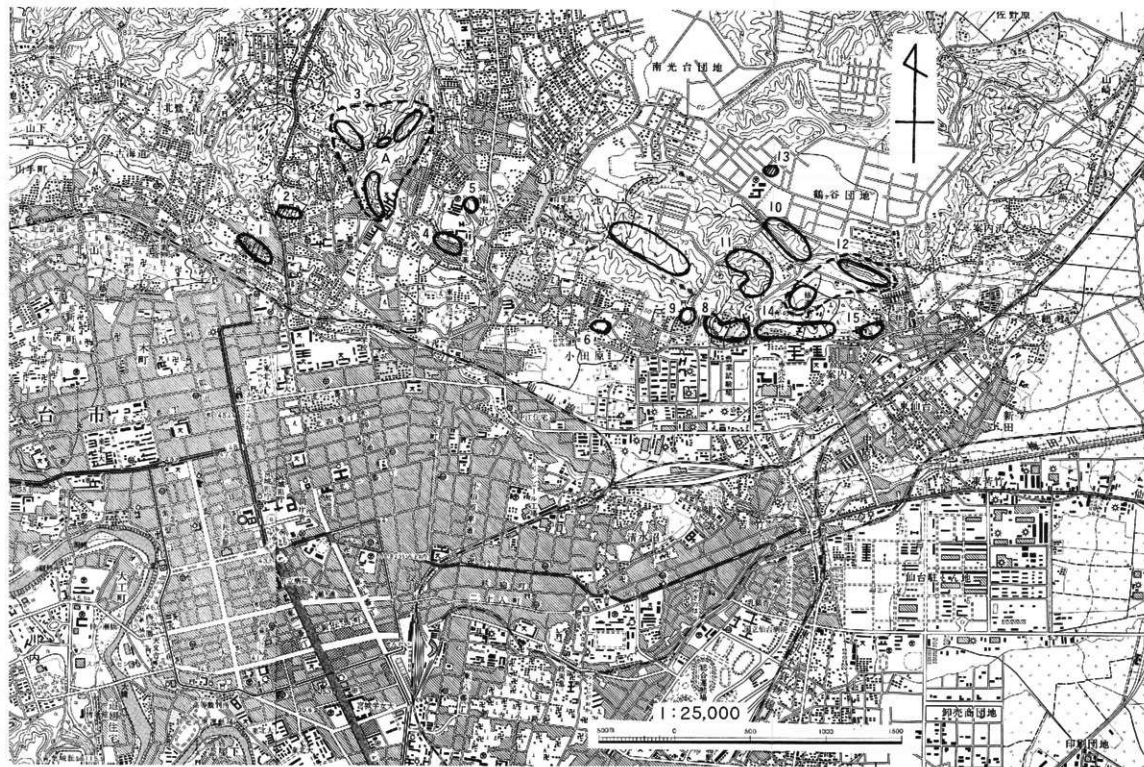


図2 台原・小田原集落群分布図

表2 略年表

西暦	時代	年号	歴史的事項	多賀城	陸奥国分寺	主要窟跡	備考
710	奈良	和銅3	平城遷都	(創建?)		日の出山窟跡 (色麻村)	
715		霊亀1	郷里制施行				
	時			第I期	(創建?)	木戸窟跡 (田尻町)	
741		天平13	園分寺造営の詔	+			
745		天平17	東大寺起工	+			
749		天平勝宝1	陸奥国小田郡黄金貢獻	+			
	代			第II期			
767		神護景雲1	伊治城、桃生成る。	+			
780		宝亀11	伊治公野麻呂の乱	+			
794		延暦13	平安遷都	+			
802		延暦20	坂上田村麻呂、胆沢の蝦夷を討つ 胆沢城成立	+			
	平			第III期		神明社窟跡 (蟹沢中)	
				+			
	安貞			第IV期		五本松窟跡 A地点 (仙台市)	
869		観11	陸奥国大地震	+			
	時			第IV期			
934		承平4	陸奥国分寺七重塔、雷火で焼失	+			
	代			第IV期			
1051		永承3	前九年の役	+			
1080		承暦4	陸奥国分尼寺顕倒				

图3 五本松露辟A地点地形图

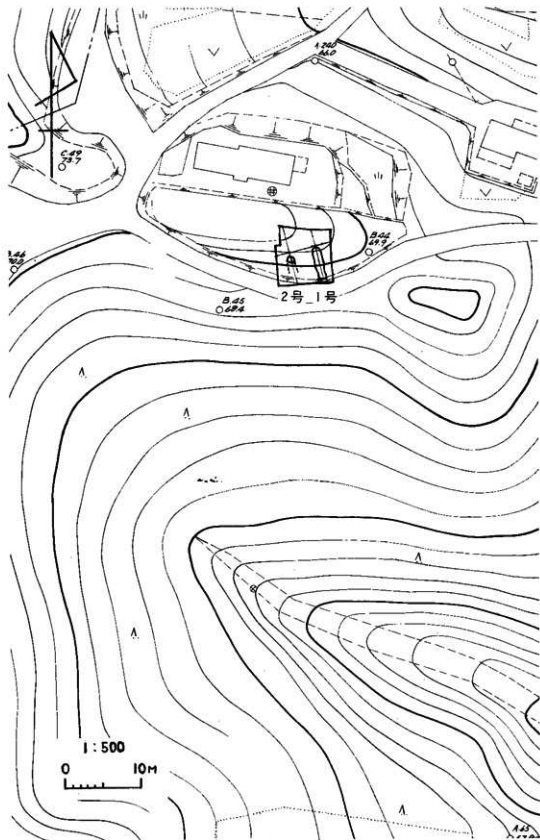
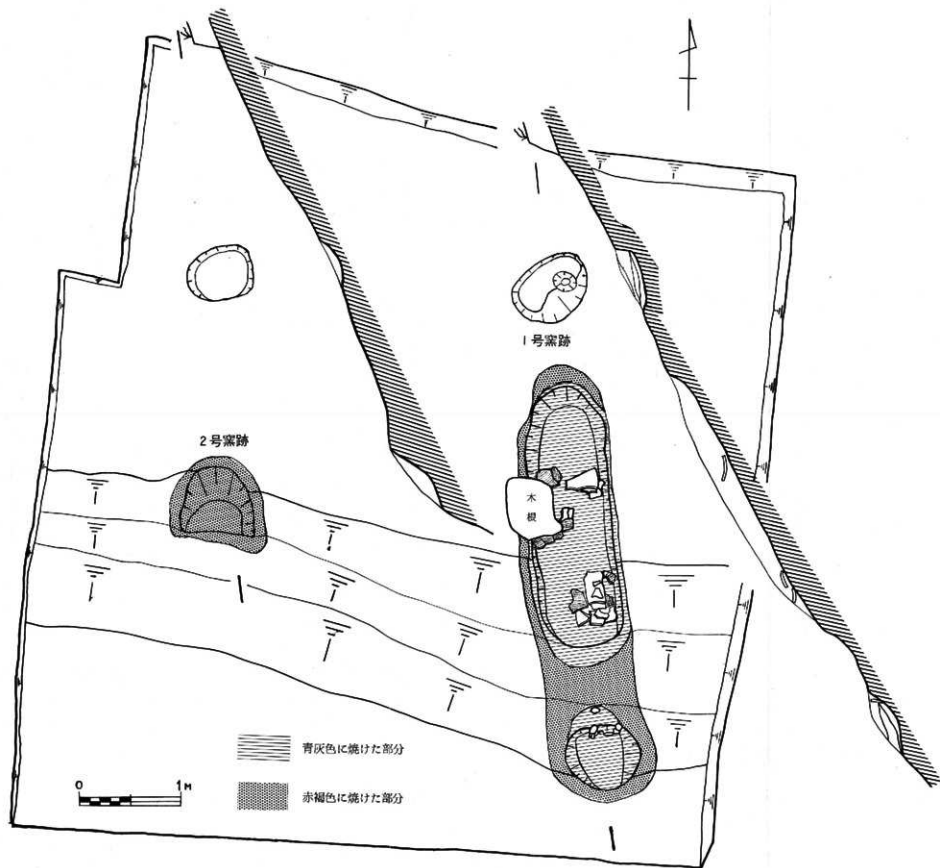


図4 五本松A地点竈跡実測図



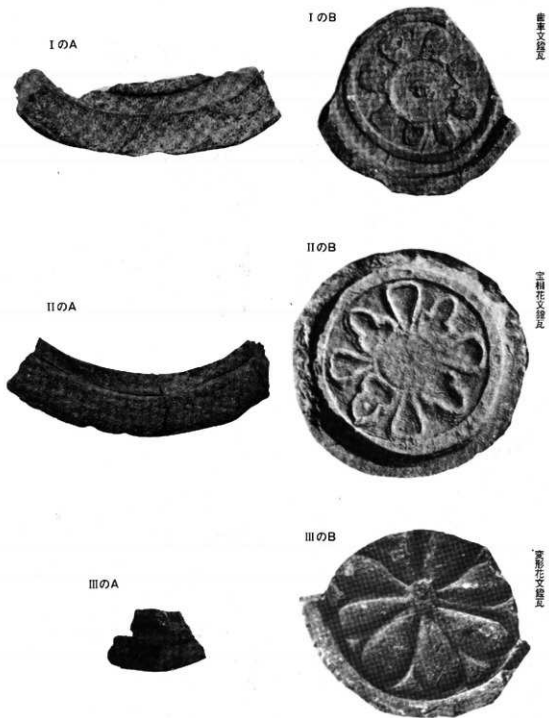


図5 五本松窯跡 1号窟出土軒丸瓦片(A)と想定される瓦(B)

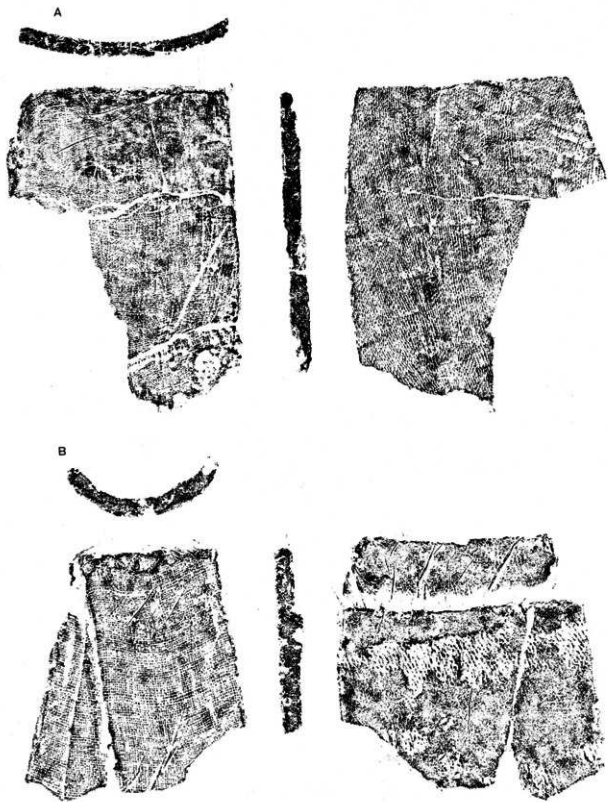
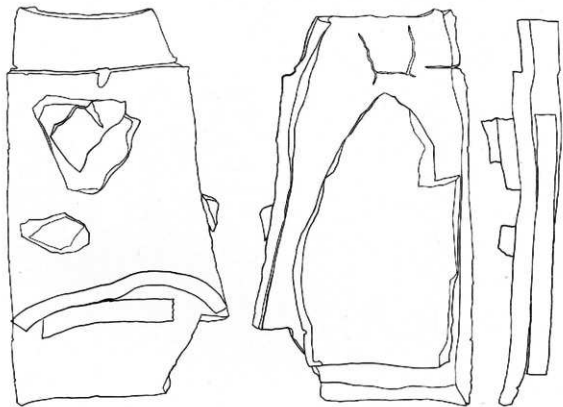
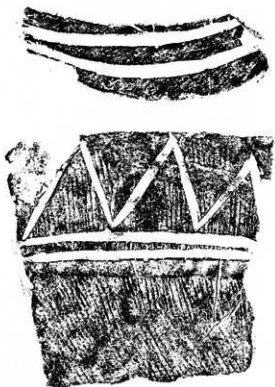


图6 五本松窟跡1号窟出土瓦 1号窟出土瓦拓影 A平瓦 B丸瓦



(上) 图7 五本松窯跡1号窯底出土瓦



(左) 图8 志波遺跡出土瓦拓影



A 遺跡遠景(中央やや右より)



B 遺構検出写真(左・2号室 右・1号室)

写真 3

1号窯跡全景(瓦は床に張りついている)



B 1号窯跡全景(瓦底の瓦をはずした状態)

A 凸面



B 凹面



写真4 1号窯窯底出土の瓦

仙台市文化財調査報告書

- 第1集 天然記念物霊巖下セコイヤ化石林調査報告書(昭和39年4月)
- 第2集 仙台城(昭和42年3月)
- 第3集 仙台市燕沢淨応寺横穴古墳群調査報告書(昭和43年3月)
- 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書(昭和44年3月)
- 第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書(昭和47年8月)
- 第6集 仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書(昭和48年10月)

仙台市文化財調査報告書第6号 五本松窯跡発掘調査報告書

昭和48年10月発行

発行 仙台市教育委員会
仙台市国分町3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社東北プリント
仙台市立町24-24 TEL25 6466(代)



国会図書館